

氏 名 ひろ た よう すけ  
弘 田 陽 介  
学位(専攻分野) 博 士 (教 育 学)  
学位記番号 教 博 第 30 号  
学位授与の日付 平成 15 年 3 月 24 日  
学位授与の要件 学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当  
研究科・専攻 教 育 学 研 究 科 教 育 学 専 攻  
学位論文題目 近代の擬態／擬態の近代  
——カントにおける読者・身体・人間——

論文調査委員 (主 査)  
教 授 山 崎 高 哉 助 教 授 鈴 木 晶 子 教 授 矢 野 智 司

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、カント (Immanuel Kant, 1724-1804) の『純粋理性批判』(1781年/1787年)に代表される「超越論的哲学」と『実用的見地における人間学』(1798年, 以下『人間学』)に代表される「経験」に裏付けられた思索との思想的連関のうちに「近代」の「人間」の誕生を見いだすとともに、『判断力批判』(1790年)の中に「近代」の「人間」という括りでは捉えられないカントを描こうとする試みである。本論文は、「はじめに」と5章から成る本論, それに「美のディスクール／恋愛のディスクール—結びにかえて—」によって構成され, 400字詰原稿用紙に換算して600枚を優に超える力作である。

「はじめに」において, 論者は, フーコー (Michel Foucault, 1926-1984) に「近代」の「人間」の産みの親と見なされたカントが「超越論的哲学」から, いかにして「近代」の「人間」を生み出すことになったのかを18世紀後半におけるドイツ思想の坩堝の中を探るとともに, 「近代」に収まり切らないカント, 「人間」に収まり切らないカント像をも捉えようとする本論文の意図を表明している。

第1章「カントを読むということ, カントを書くということ」では, まず初めに, 18世紀後半のドイツにおける「読書革命」と呼ばれる印刷や書物流通の飛躍的な発展によって「読者」という新たな市民階層が成立し, 著者と読者の書物を介してのコミュニケーションが生まれ, カント自身もそのような思想のネットワークの中心にいた時代背景が描き出される。次に, 論者は, 従来のカント研究のように, カントの著作群を積義的に読むのではなく, 彼が生きた時代の著者・読者のコミュニケーションの中で, 彼が読者の「読み」にどのように「語り」かけ, いかなる影響を及ぼしたのか, また逆にカントが読者の「読み」をどう汲み取り, 自らの著作の「語り」にどう反映させたのかを記述しようとする自らの研究手法を語っている。論者によれば, これは, 主にフランスのポスト構造主義以降のテキスト解釈論に依拠した手法であるという。

第2章「身体というテキスト」においては, 論者は, 近代の書物コミュニケーションの経路では, 思弁的な哲学のみが議論されたのではなく, 人間の日常の交際や私的感覚・感情の問題, また自らの身体にかかわる医学や健康の問題も話題になったことを明らかにするとともに, その身体の語られ方を, カントと同時代人である思想家や教育者, 文学者のテキストを取り上げて, 論じている。そこで議論の対象になっている身体とは, 単に精神や魂と対置されるような身体ではなく, 近代市民のコミュニケーションを成り立たせる一つの装置としての身体である。カントもこのようなコミュニケーションの中で動きつつ, 距離を取り, 独自の思想を構築した。論者は, そのようなカントの思想の中で身体の姿を見つけることが本論文の課題の一つであると述べている。

第3章『『純粋理性批判』—理性の裁判所—』では, 論者は, 『純粋理性批判』がドイツ各地で様々な反響を呼び, カントは一躍時代の書物コミュニケーションの中心の位置を得るが, 彼は読者を「裁判官」として自らつくり上げた「理性の裁判所」に招き入れながら, 一転「裁かれる被告」となし, 読者は自らが信じていた命題を証明されると同時に否定され, また自らが持っていた認識の枠組みそのものを破碎されてしまうことを明らかにする。カントの『純粋理性批判』は, 理性が理性を裁く, 「人間」が「人間」を裁く裁判所なのである。この裁判の過程を通して, 読者は自らの個別の経験や属性をすべ

て剥ぎ取られ、超越論的哲学によって構成された普遍妥当な「人間」としてつくり替えられることになるのである。

第4章『『人間学』—『近代』の『人間』の誕生—』では、『純粋理性批判』による超越論的な知の洗礼を受けた読者が「人間カント」を髣髴とさせ、具体的な人間の「手ざわり」を与えてくれるテキストとして求めた『人間学』が選ばれ、批判哲学とは異なる人間の語りを紹介される。ここでは、身体や日常の諸事象の語り、日常生活における社会的コミュニケーションなどが取り上げられ、読者は、これらの経験的人間学を超越論的哲学との連関で読み、日常生活の中に理性の働きを見だし、理性の哲学の中に「人間」のコミュニケーションを重ねていくことになる。こうして、読者が『純粋理性批判』と『人間学』を読み合わせることによって、フーコーの言うような「経験的=超越論的二重体」としての「近代」の「人間」が誕生することになる。

第5章『『判断力批判』—擬態のテキスト/テキストの擬態—』で、論者は、これまでフーコーがカントの批判哲学と『人間学』との組み合わせの中に「近代」の「人間」の誕生を見いだした現場を明らかにしてきたが、しかし、カントの思想にはフーコーの言う「人間」には収まり切らないものがあるのではないかと、フーコーが提示した一つの「近代」の見え方と共存しながら、それを破壊していくようなものが交じっているのではないかと考え、従来のカント研究では超越論的哲学にも経験的人間学にも属さない「混乱したテキスト」として扱われてきた『判断力批判』を取り上げて考察を加えている。論者によれば、本書でカントが目論んだことは、判断力や美を定式化することではなく、そのような捉え切れないものをどう描き出すかを実践してみせることであった。この実践は、読者一人一人に自分にしか捉えられないように思われる何かを残し、「なんとなくわかる」ような伝達の様式であって、超越論的哲学と経験的人間学が織り成した「近代」の「人間」のコミュニケーションの網の目から擦り抜けていくようなものである。

「美のディスクール/恋愛のディスクール—結びにかえて—」において、論者は、「目的なき合目的性」という問題を手がかりに、『判断力批判』のカントは、『純粋理性批判』における認識論や『実践理性批判』（1778年）における道徳論のように、しっかりした厳格な議論をしようとしたのではなく、美の議論のような、近代市民の有用性から外れた戯れの会話/会話の戯れのためにあるような議論をしようとしたのではないかと指摘する。カントは、自分で自分を「人間」の罫にかける「擬態」の言語によって、批判哲学の言語をだまし、猛り狂わせることによって、読者が読みたい「カント哲学」と「人間カント」の間を擦り抜けていくのである。論者は、ここに、美のディスクールの中に思想家としての自らの姿を眩ませたカント、「近代」の「人間」という括りでは捉え切れない「不気味な」カントを見据えている。

## 論文審査の結果の要旨

本論文の学問的価値は、第一に、従来のカント研究及び思想研究一般と比較して、論者が取った研究姿勢と研究手法の斬新さにある。

(1) これまでのカント研究や思想研究は、ある注目すべき著作や概念を精密に検討し、その著作や概念のもつ意味を、その著作に内在したものと捉え、テキストの記述の一貫性・整合性を重視する「意味確定」という作業を行ってきた。これに対して、論者は、フランスのポスト構造主義の一群の思想家たちのテキストの読み方、書き方に学びながら、カントのテキストは近代の発端を特徴づけるような著者と読者とのコミュニケーションによって生まれたものと見なし、カントの著作が当時の読者及び今日に至る読者に対して持っている効果をつかまえ、それを再度テキストとして記述しようと試みた。カントのテキストを起点として、カント本人を含む当時の思想のネットワークの流れ、そして今日まで続くカントを読む読者の思想の流れを俯瞰しながら、同時にその流れの中で再度カントを書き表す、換言すれば、カントの思想をテキストの運動体として読もうとしている。

(2) 論者は、先行研究がカントを「理性の哲学の権化」と見なし、カント哲学を厳密な哲学、理性中心の哲学と読んできたことへの意義申し立てを行っている。論者によれば、従来の読み方では、カントのイメージを『純粋理性批判』に代表される批判哲学に押し込めることになり兼ねない。この一面性を乗り越えるためには、カントを彼の生きた時代の著者と読者が織り成す知の状況の中に置き、人間カントを髣髴とさせる『人間学』と『純粋理性批判』双方の著作を読み合わせることによって、フーコーの言うような「経験的=超越論的二重体」としての「近代」の「人間」の誕生を見ようとしている。

(3) 論者は、『純粋理性批判』と『人間学』とを読み合わせることによって、「近代」の「人間」の誕生を見たフーコーの

読み方を共有しながら、さらにカントには「近代」の「人間」を産み出し、同時にそこからずれて「近代」に収まらないカント、「人間」に収まり切らないカントの側面があるのではないかと考えた。そして論者は、従来のカント研究では超越論的哲学にも経験的人間学に属さない「混乱したテキスト」として扱われてきた『判断力批判』を取り上げて考察し、自分で自分を「人間」の罫にかけ「擬態」の言語によって、批判哲学の言語をだまし、猛り狂わせることによって、読者が読みたい「カント哲学」と「人間カント」の間を擦り抜けていく、美のディスクールの中に思想家としての自らの姿を眩ませたカント、「人間」の言語を語りながらも、その言語を戯れの中で空転させ、何も語らないカントを見いだしている。

(4) 論者はまた、19世紀以降細分化した哲学や教育学、歴史学、文学等の学問区分に捉われず、むしろそれらの学問が学問としての同一性を確保するために切り捨ててきたものからカントを読み、「哲学」に収まり切らない奥行と広がりを持つ彼の思想の多元性・重層性を浮き彫りにしている。

本論文の学問的価値の第二は、上述のように、論者がカントを読み、かつ書くという営みを彼が生きた18世紀後半の著者・読者のコミュニケーションの中から捉え返す試みを行うことによって、18世紀後半のドイツ思想において「身体」がどのような形で議論され、他の関連概念の中にどのように入り込んでいるかを考察するとともに、カント思想の中に「身体」の姿を見だし、カントでは「身体」は主題として論じられていないとされてきた従来の見解を覆したところにある。論者は、カントにとっての身体を『視霊者の夢』(1766年)から始め、『純粹理性批判』、『人間学』の中に探っている。すなわち、『視霊者の夢』では、身体は魂の働きとしての感覚を伴った物体であったが、『純粹理性批判』では、魂と身体は非物体—物体の二元論として捉えられるのではなく、いずれも感官を通して得られる現象として、物自体である一つのものの二種類の現れ方—身体は外的感官によって、魂は内的感官によって表象されるもの—となっはいるが、身体と感官とのつながりは不可知なものであった。それが、『人間学』では、身体は物から触発を受ける、視覚・聴覚等の五官という器官及びそれら以外の部位を含む総体と考えられ、読者にとって分かりやすい、常識的なものになっている。さらに、『人間学』のカントは、身体・感官から得られる感覚を単なる認識表象としてではなく、他の人々に伝達され、共有される感情としても取り上げ、「コミュニケーションする身体」について論じている。したがって、論者は、カントの思想において「身体」は論じられていないのではなく、あたかもよく煮込まれた「カレーの玉ねぎ」のように、思想に馴染んでしまい、溶け込んでいるために見えなくなっているだけであると結論している。

本論文の学問的価値はそればかりではない。本論文の第2章「身体というテキスト」で展開された18世紀後半のドイツにおける近代市民のコミュニケーションにおいて身体がどのように語られ、批判されたかについての考察は、これまで論じられることの少なかった18世紀後半の身体をめぐる言説、とりわけラヴァター (Johann Kaspar Lavater, 1741-1801) やバゼドウ (Johann Bernhard Basedow, 1724-1790)、ヴィヨーム (Peter Villaume, 1746-1825) らのテキストを取り扱い、それらが単に身体というテキストの読み方を教えるのではなく、身体を通して内面を再構成していくという性格を持っていたことを明らかにしており、身体論や教育思想史の分野への貢献にも大なるものがある。

本論文は、以上のように、学問的に高く評価できる顕著な長所を有しているが、論者の研究のさらなる展開に対する期待を込めて、問題点をいくつか指摘しておこう。一つは、論文の全体的構成、なかでも自らの研究手法の独自性について一括して「はじめに」や各章の冒頭において叙述されておれば、読者の「読み」をもう少し容易にしたのではないかと惜しまれる。今一つは、本論文の「鍵概念」の一つになるであろうと思われる概念が注に回されていたり、あまりに通俗的な言い回しが散見されるなど、一工夫が望まれる。

もちろん、これらの問題点は、論者によってすぐにでも解決され得るものであり、カントの読み方、書き方に新機軸を打ち出し、課程博士論文の水準を凌駕している本論文の価値を損なうものでは決してない。

よって、本論文は博士(教育学)の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成15年2月13日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。